

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 茨城大学教職大学院、鹿嶋市校長会、神栖市校長会 事業名：【NITS・茨城大学教職大学院コラボ研修】 地域スクールリーダー育成セミナー ～校長会との連携による次期管理職候補者育成研修～ 研修等名：【NITS・茨城大学教職大学院コラボ研修】 地域スクールリーダー育成セミナー ～校長会との連携による次期管理職候補者育成研修～ 開催日時：令和 6 年 8 月 23 日 9 時～12 時 開催場所：鹿嶋市中央公民館（茨城県鹿嶋市宮中 4631-1） 参加人数等：鹿嶋市・神栖市内公立小中学校教諭 33 名、教頭 30 名、校長 17 人（総数：80 名）
--	--

目的：

茨城大学教職大学院は平成 30 年 3 月に NITS と連携協力協定を結んで以来、茨城県内の現職教員の研修の高度化・体系化のために、地域ネットワークを生かした出前研修を行ってきた。令和 3 ～ 5 年度には、NITS・教職大学院コラボ研修事業の支援を受け、地域に根差した団体との連携による研修を実施し、各地域の課題に即した研修を展開することの重要性を認識するとともに、社会貢献に務めてきた。

本コラボ研修は、学校管理職及び次期管理職候補の教職員に対して、学校マネジメントに関する講義・演習を実施することを通じて、これからのスクールリーダーに求められる資質能力の育成に寄与することを目的とした。市校長会は、各校長が日常的につながる機会の多い、身近な存在である。今年度は、昨年度までの実績を踏まえ、市校長会の要望を聞いたところ、演習中心でのプログラムを依頼された。当方の派遣講師による喫緊の学校マネジメントに関する講義を踏まえ、同市内および隣接市の管理職等（教頭、主幹教諭、中堅教諭等）がマネジメントに関する現任校に根差したディスカッションを行うことで、より実践的な研修を計画した。具体的には、鹿嶋市・神栖市校長会と連携し、両市内小中学校の教頭ならびにミドル層の教諭を対象としたセミナーを行った。また、市校長会の幹部委員をはじめ、鹿嶋市・神栖市内の小中学校校長にも参加してもらった。市校長会を通じて、各校へ募集をかけ、校長から推薦する形で受講者を募集したため、次期管理職候補の教職員が本研修へ積極的に参加することができた。

内容：※全体発表の内容をテーブル起こしするなど、具体的に記載してください。

当日は、鹿嶋市・神栖市校長会の意向を踏まえ、「『令和の日本型学校教育』と学校経営の課題」というタイトルで講義を 70 分行った。講義は、加藤崇英教授（茨城大学教職大学院学校運営コース）が担当し、「令和の日本型学校教育」をめぐる政策の方向性を踏まえた上で、学校経営の視点から学校現場の対応・対策として求められる考え方と実践の在り方を講義した（『写真 1』）。

講義のあと、昨年度までの実績を踏まえ、演習の時間を 40 分程度設け、校長会の意向を反映した 4 つの課題ごとに、教諭グループ、教頭グループで分かれ、協議を行った（『写真 2』）。演習の 4 つの課題は、①人材育成・学校活性化、②不登校解消支援に向けた組織的対応力向上、③風通しのよい職場環境づくり、④服務規律を「自分事」と考えさせ、不祥事ゼロを目指す学校づくりであった。この 4 つの各課題に対して、参考資料を掲載したテキストブックを作成し、参加者全員に配布し好評を得た。このテキストブック（『写真 3』）は、本事業予算で作成し、テキストブックの裏表紙に本研修が「令和 6 年度 NITS・茨城大学教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業」の助成を受けて実施されたものであることを明記した。演習では加藤崇英教授、鈴木稔教授、高野貴大助教（いずれも茨城大学教職大学院学校運営コース）が指導助言を行った。

成果：※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載して下さい。

研修終了後、受講アンケートを実施し、教諭 33 名、教頭 30 名、計 63 名から回答を得た。その結果、セミナー全体の満足度は肯定的解答がほぼ 100%（「満足している」：84.1%、「まあ満足している」：12.7%、無回答：3.2%）であった。今年度から導入した演習についても「実践に活かすことのできる内容でしたか。」という質問に対しても、肯定的評価を得た（「そう思う」：82.5%、「どちらかと言えばそう思う」：14.3%、無回答：3.2%）。また、自由記述として、「毎年行っていたら大変有難いと感じています。特に、学校経営については、まだ実践していく所で知らないことも多く、もっと知りたいと思う反面、学ぶ機会や学び方に弱さを感じていた所でしたので、貴重な時間になりました。」や「本セミナーは例年夏季休業中に開催されており、参加しやすいかと思っています。」といった回答があり、継続的な学校経営に関する研修を意義づける記述が多く見られた。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付きに以下 2 点がある。

第一に、「共通言語① 研修デザインの三角形」とかかわって、受講者の「気づきや変化」を重視した研修へと転換を図ったことである。今年度の新たな試みとして、教職大学院の研究者教員と実務家教員によるチームティーチングでの講義を踏まえた演習中心の研修を実施した。具体的には、研究者教員より、講義テーマに関する理論や政策の背景等の講義があったのち、市校長会が喫緊の課題として設定した 4 つの課題に分かれて演習を行った。同市内および隣接市から参集した管理職等のディスカッションを行うものであり、地域の事情に応じたマネジメントに関する学びが得られたと考える。実際に、研修終了後のアンケートの自由記述では「国・県の動向を分かりやすくご講義いただき、改めて令和の日本型学校教育について理解を深めることができました。演習では、他校の先生方のご意見から自校を生かせることが見つかりました。」といった回答のように、講義で得た気づきを、実践課題と結びつけて捉える受講者が多くみられた。研修担当者としては、受講者の「気づきや変化」を促すために、講義および演習テーマの双方において、連携先のニーズが生かされることが大切であると気付いた。

第二に、「共通言語③ 豊かな気づきが醸成される学び」とかかわって、昨年度と継続して校長会と連携し、研修を実施し、NITS・教職大学院等コラボ研修での次期管理職養成について、さらなる深化を図れたことである。今年度のセミナー受講者には昨年度も受講した管理職等が一定程度含まれ、上記「成果」欄で既述の通り、継続的な学校経営の研修を意義づける自由記述回答が見られた。また、昨年度の講話が良かったため、他の大学教員の講義も聞きたいとの回答も見られた。研修担当者としては、受講者と研修担当者が一定程度継続的に、学校経営に関わる研修を行っていくことの重要性に気付くことができた。

アイデアや工夫したこと：※実際の様子がより分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明してください。

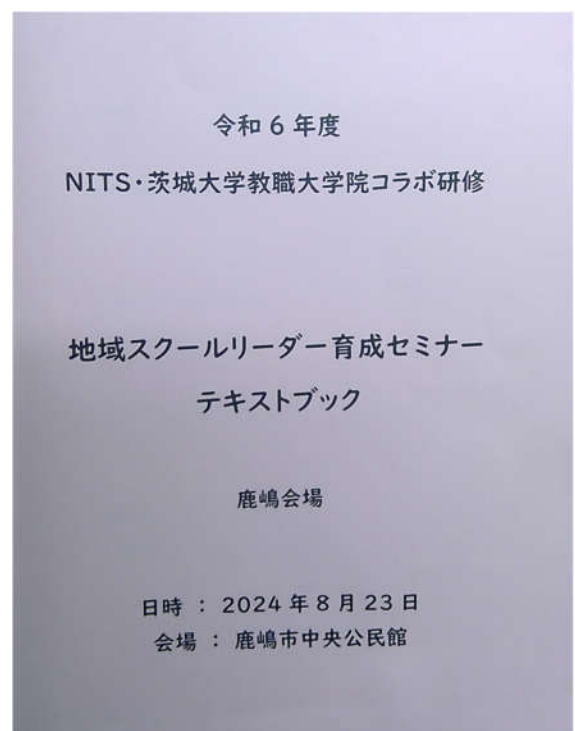
- ・市の校長会の意向を勘案して、講義テーマを設定し、地域における喫緊の課題に応えたこと（写真 1）
- ・昨年度までの連携の実績を踏まえ、今年度はテーマ別、職位別の演習の時間を設定したこと（写真 2）
- ・演習テーマに沿ったテキストブックを作成し、講義・演習での理解を手助けするツールを配布したこと（写真 3）



↑ 写真 1 講義の様子



↑ 写真 2 演習の様子



↑ 写真 3 テキストブック